日 本 ハ ー ディ 協 会 第 68回 大 会

日時　2025年10月25日（土）11：10〜17：40
場所　阪南大学あべのハルカスキャンパス
〒545-6023大阪市阿倍野区阿倍野筋1-1-43　あべのハルカス23階
会場教室　セミナー第1室
電話　06-6654-5570　**大学HP**　https://www.hannan-u.ac.jp/harukasu/

開会の辞　（11：10）　総合司会　日本ハーディ協会庶務委員長　東京都立大学教授　亀澤 美由紀

研究発表　（11：15〜11：50）　司会　近畿大学准教授　高橋　路子

エグドン・ヒースを司るものー『帰郷』にみる作者機能の特異性
大阪成蹊短期大学准教授　麻畠　徳子

昼食休憩　（11：50〜13：00）

総会　（13：00〜13：30）　司会　日本ハーディ協会事務局長　名古屋学院大学教授　西村　美保

○会計報告 ○編集委員会報告（会報・協会ニュース）○次期大会について ○その他

シンポジウム　（13：40〜15：50）

「ハーディをどう読むか――若手研究者を中心に」

司会・講師	日本女子大学教授	坂田　薫子
講師	東都大学非常勤講師	永盛　明美
講師	順天堂大学助教	廣瀬　絵美
講師	大妻女子大学准教授	加藤　彩雪

特別講演　（16：00〜17：20）　司会　フェリス女学院大学教授　向井　秀忠

トマス・ハーディと英文学教育成立事情

講師　慶應義塾大学教授　原田　範行

閉会の辞　（17：30）　日本ハーディ協会会長・西南学院大学教授　金子　幸男

懇親会　別途ご案内いたします。

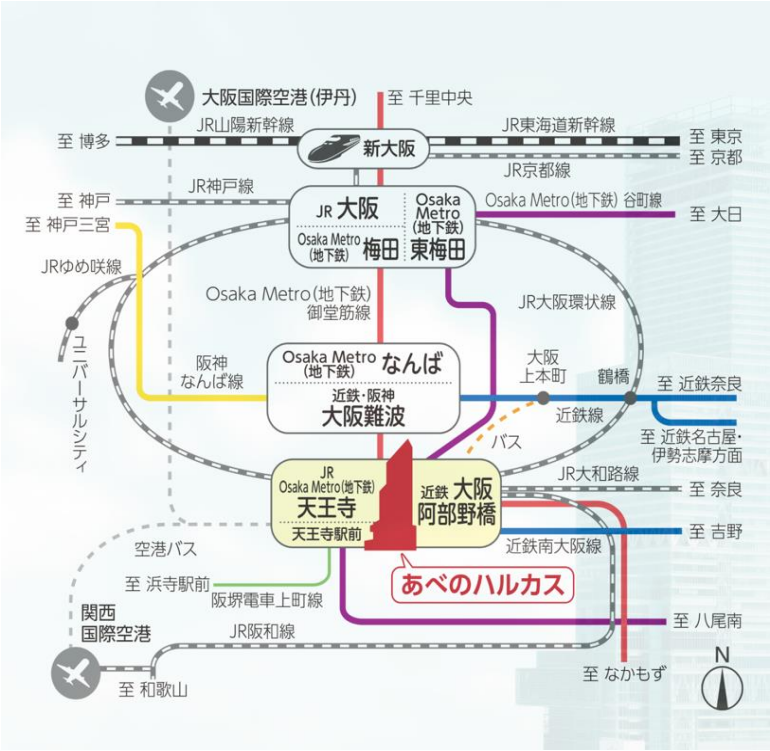
※ 受付は10時30分から開始します。懇親会に参加される方は、受付の際に懇親会費をお支払い下さい。なお受付では年会費の徴収は行っておりません。
※ セミナー室は飲食禁止（ふた付ペットボトル等は可）でイートインスペースでは可能です。6席と限られているため近隣飲食店もご利用下さい。休憩室（応接室）および発表者控室（相談室1・2）では、茶菓の準備はいたしておりません。飲み物等は各自でご用意下さい。
※ ゴミの処分は各自でお願いします。各部屋にゴミ箱を用意しますが、15時までに片付けます。それ以降は恐れ入りますが、お持ち帰りください。
※ 新型コロナウイルス感染症の拡大状況およびその他やむを得ぬ事情によっては、リモート開催に変更させていただく場合もございます。
※ 大会への出欠確認については、別途ご案内いたします。非会員で当日参加希望の方は、あらかじめ下記の日本ハーディ協会事務局までご連絡ください。
※ 当日は、密にならないよう十分に広い会場で行います。発熱や咳、倦怠感などの症状がある場合は参加をお控えください。

問い合わせ先： 日本ハーディ協会事務局
〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1-25　名古屋学院大学外国語学部　西村美保研究室内
メールアドレス： jimu.thsjapan@gmail.com

主催　日本ハーディ協会
後援　阪南大学

【あべのハルカス所在地】

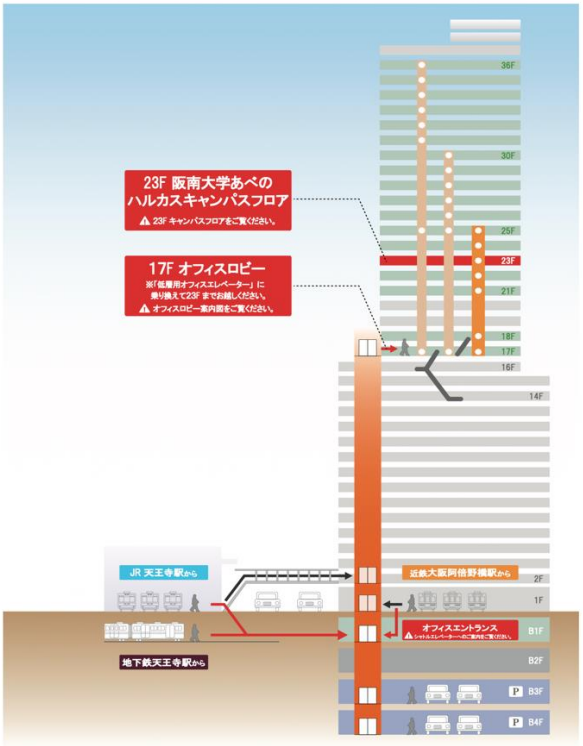
天王寺駅（JR・大阪市営地下鉄）、大阪阿部野橋駅（近

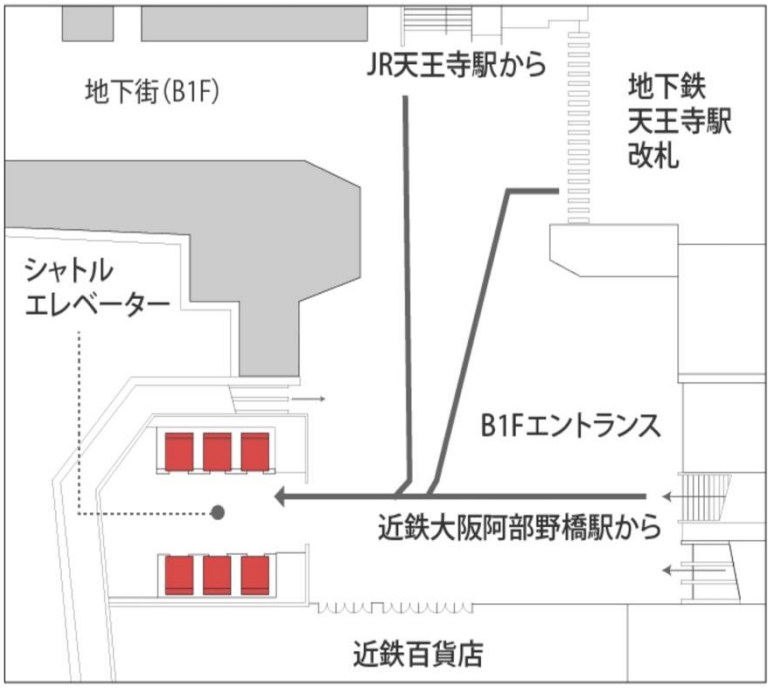


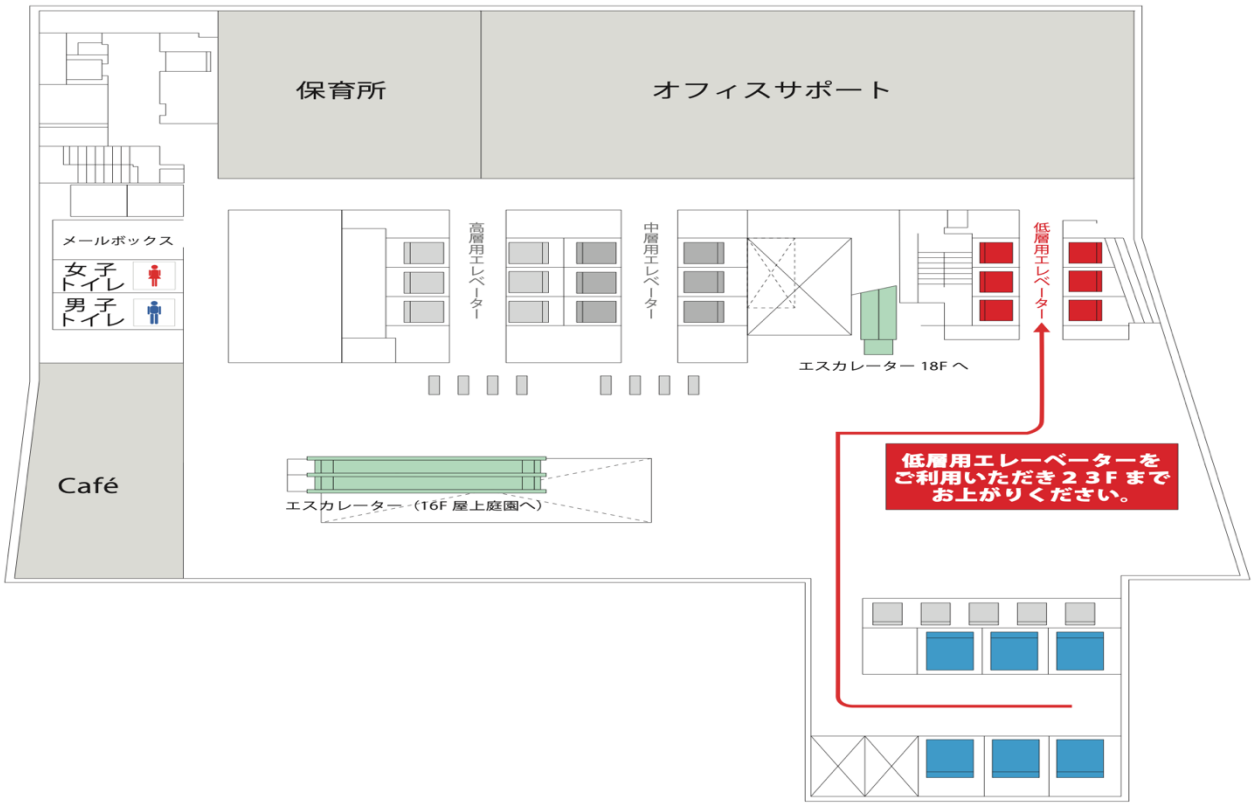
【阪南大学あべのハルカスキャンパス】

23 階オフィスフロアにございます（下図①）。**地下 1 階**のオフィスエントランス（下図②）よりシャトルエレベーターに乗車いただき、17 階のオフィスロビーへ。17 階でシャトルエレベーターから低層用オフィスエレベーターに**乗り換えていただき**（下図③）23 階へお越しください。

①建物全体　　②天王寺駅（JR・大阪市営地下鉄）からのアクセス







③あべのハルカス内（17 階での乗り換えイメージ図）

《研究発表概要》

エグドン・ヒースを司るもの－『帰郷』にみる作者機能の特異性

麻畠　徳子

1895 年から 97 年にかけて出版された「ウェセックス・ノヴェルズ」シリーズにおいて、ハーディはそれまでに出版した主要な長編小説を再編集し、統一装丁を採用することにより、読者に作品群の統一的な世界観を提供した。ウェセックスという呼称は以前から用いられていたが、シリーズを刊行するにあたり、その呼称が使用される前の初期作品についても地名の統一が図られた。収録した作品群を「ウェセックス」という架空の地域に再配置した意図は、歴史上イングランドに実在したかつての王国を想起させると共に、ハーディ自身が生まれ育ったイングランド南西部の農村社会に小説空間を重ね合わせることで、作品群がひとつの連続した歴史と文化のなかで展開されるような印象を読者に与えることにあったといえる。同時に、その試みは小説家トマス・ハーディといえばウェセックスという、独自のブランドイメージを確立しようとすることにもつながったといえるだろう。

本発表では、こうした「ウェセックス・ノヴェルズ」の作者というラベルをハーディ自らが創り出したことに注目し、そのラベルがあることによって、作品群がどう扱われるか、どう解釈されるかをコントロールしようとしている、ハーディの「作者機能」の特異性について考察する。主な考察対象として、土地と物語が不可分な関係にある『帰郷』(1878)をとりあげる。物語冒頭から描写されるエグドン・ヒースという荒野の圧倒的支配力と、その支配から逃れようとするヒロイン、ユーステイシアの物語が、作者の声によってどのように語られているかを分析することをつうじて、作者の声の支配力とそこからの逸脱の両義性を指摘したい。

《シンポジウム概要》

ハーディをどう読むか――若手研究者を中心に

司会者　坂田薫子

今回のシンポジウムは敢えて統一テーマを掲げず、若手研究者が中心になり、それぞれの興味からハーディを読み解いていきます。まず、永盛明美先生がハーディの詩と短編小説「リール舞曲のフィドル弾き」に見られる音楽性を読み解きます。次に、廣瀬絵美先生が作品に登場するフォークソングに注目し、『はるか群衆を離れて』を読み解きます。そのあと、加藤彩雪先生が D.H. ロレンスの『トマス・ハーディ研究』を分析し、ロレンスから見たハーディを読み解きます。そして最後に、坂田がアセクシュアリティという性的指向から『日陰者ジュード』を分析します。司会者を除き、新進気鋭の研究者の皆さんに、新鮮なハーディ観を披露してもらうことで、フロアとともに活発な質疑応答が生まれることを期待しています。

ハーディ作品における田園の音楽性――「フィドル弾き」が奏でる喜びとその陰影

発表者　**永盛明美**

短編小説「リール舞曲のフィドル弾き」において、ハーディはフィドル弾きの奏でる旋律によって人々が舞い踊るシーンを印象的に描き出しています。同様の主題は詩「フィドル弾き」にも織り込まれており、この詩は、ハーディの第 3 詩集『時の笑い草とその他の詩』（1909）に所収された 18 篇の詩よりなる「一連の田園の歌」の一篇に位置付けられます。「一連の田園の歌」についてベイリーが「田園生活の喜び」を強調していると指摘するように、詩「フィドル弾き」もまたハーディの故郷に息づく生の「喜び」を、詩人の幼少期より親和性の高かった音楽とダンスを通し描き出しているといえるでしょう。しかしながら本詩作品に書き込まれるのは、「喜び」のみにとどまりません。本発表では、詩「フィドル弾き」を中心に、本詩作品と深い関連性を持つ短編小説「リール舞曲のフィドル弾き」に分析を加えるとともに、「不死鳥亭でのダンス」や「カントリーダンスの一時停止で」などの他の詩作品にも焦点を当て、ハーディ作品における音楽性とダンスのもたらす効果について考察します。

『はるか群衆を離れて』におけるフォークソング

発表者　**廣瀬絵美**

ハーディは、小説の中で登場人物の心情や物語の展開を示唆する象徴として、しばしばフォークソングを用いています。彼自身も地元ドーセットのフォークソングの収集を行っており、この伝統歌謡に深い造詣を持っていました。この背景には、19 世紀後半に展開された、消えゆく田園地帯の歌を記録・保存しようとする英国民謡復興運動との関連性を見ることができます。ハーディは、フォークソングが日々の生活のなかで歌われている情景を小説のなかで鮮明に描写することで、別の形で民謡復興運動にアプローチしていたのではないかと考えられます。このような視点から、本発表では、『はるか群衆を離れて』におけるフォークソングを紐解きながら、歌が、バスシバや他の登場人物にどのような心理的作用をもたらし、さらにはコミュニティ内の関係性や階級的な差異、社会的価値観を浮かび上がらせる手段として用いていたのかを読み解いていきます。

19 世紀の終わり、20 世紀のはじまり――D. H. ロレンスによるハーディ的遺産の継承

発表者　**加藤彩雪**

D. H. ロレンスは、トマス・ハーディの約 40 年後に生まれ、1930 年に短い生涯を終えました。よく知られているように、19 世紀末から 20 世紀初頭の西洋社会では既存の価値体系が揺らぎ、人々はそれに代わる新たな指針を模索し始めていました。ロレンスもまた、当時の知識人の一人としてこの時代的課題に向き合い、人間の身体にこそ現代を再構築する鍵があるのではないかと考え、その探究に真摯に取り組みました。このような身体への関心から見ると、ロレンスは一見ハーディとは趣を異にする作家のように思われます。しかし彼は、『トマス・ハーディ研究』において、ハーディの小説を高く評価しています。本報告では、時代的背景や生

活した地域の違いを踏まえながらも、ハーディのテクストが時を越えてロレンスにどのような影響を与えたのかを検討します。ロレンスはハーディのどのような思想を受け入れ、また何を受け入れられなかったのか――その輪郭を明らかにすることが本報告の目的です。

アセクシュアルとしてのスー・ブライドヘッド

発表者　**坂田薫子**

司会を務める私は決して若手研究者ではありませんが、最近、特に 21 世紀に入り、多様な性のあり方が認知されるようになってきており、耳に、そして目にする機会の増えてきた「アセクシュアリティ」という性的指向から『日陰者ジュード』の準主役のひとり、スー・ブライドヘッドを読み解くことで、パネリストとしてもシンポジウムに貢献しようと思います。発表では、スーを「アセクシュアル」の女性としてとらえ、自分の性的指向を表現する言葉を持たなかったスーは、ミランダ・フリッカーの命名した「解釈的不正義」によって苦しめられていたという観点から作品を読み解く可能性を探っていきます。

《特別講演概要》

トマス・ハーディと英文学教育成立事情

原田　範行

周知の通り、トマス・ハーディは 20 世紀に入ってから、イギリスの 5 つの大学より名誉博士学位を授与されている。1905 年（アバディーン）、1913 年（ケンブリッジ）、1920 年（オクスフォード）、1922 年（セント・アンドリューズ）、そして 1925 年（ブリストル）である。1910 年にメリット勲位を受け、その後、いくたびもノーベル賞候補に推挙されたことを考え合わせると、『日陰者ジュード』が受けた批判的世評からわずか 10 年の間に、ハーディ文学への批評界の反応が大きく変化したことが分かる。注目すべきは、当時のイギリスでは、大学をはじめとする諸種の高等教育機関において、いわゆる英文科が新設され、文学教育のカリキュラムが、そして文学研究の方法論が整備されつつあったということである。新設された英文科が、何をもって専門的な文学研究を構築しようとしていたのか、ヴィクトリア朝の批評界はその中でどのような影響力を発揮したのか、そしてその中で、ハーディ文学の何が、どのような経緯を経て、こうした英文学教育成立事情にかかわっていくことになったのか。この問いを考察するには、ハーディの文学的探求の本質的な問題への洞察とともに、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての社会および批評界の動向、第一次世界大戦、ハーディ自身のジャンル横断的な文学活動、レズリー・スティーヴンやエドマンド・ゴスらとの交流、ヴァージニア・ウルフやＤ・Ｈ・ロレンス、Ｊ・クーパー・ポーイスといった若手作家への影響、そして当時の英文学教育・研究において定着しつつあった参照基準といったものをトータルに視野に収めて考えていく

ことが必要になろう。本講演では、そのための見取り図を描くことを念頭に、その見取り図を描きつつ、改めてハーディ文学の文学史的意義を考察することができればと考えている。